

東京大学海洋研究所



ニュースレター

No.17 2008.8

●外部評価

海洋研究所外部評価

(ORI External Review 2007)を終えて

前所内評価委員長 竹井 祥郎

「研究とは趣味人が自己満足を叶えるための手段であり、それが人の役に立つかどうかは歴史が決めること」などと嘯いていられた時代は終わり、世の中は評価の時代へと突入した。象牙の塔に籠って好きなことだけをしていることは許されず、その研究が科学の進歩や人類の幸福にどのように貢献しているのか、あるいはする可能性を秘めているのか、誰にもわかりやすく説明する責任が生じたのである。そして、お金とは無縁であるはずの研究者が、その発明や発見によって何十億もの報酬が得られる時代になった。そして、2004年の国立大学の独立法人化によって、評価を重要視する傾向がさらに加速されている。

海洋研究所の外部評価は、これまで1994年度と1999年度に行われた。したがって、今回は3度目の外部評価になる。本来ならば、5年毎に当たる2004年度に第3回を行う予定であったが、2004年4月に独立法人化が施行され、それに伴い白鳳丸と淡青丸が海洋研究開発機構(JAMSTEC)に移管され、海洋環境研究センターが6年の期限付きで先端海洋研究センターへと改組された。したがって、研究船の移管に伴う研究業績の変化を知るため、および先端海洋研究センターの中間評価

に合わせて、2007年度に行うことが当時の評価委員会で決定された。そして、来るべく外部評価に備えて、当時の白木原評価委員長を中心に、海洋研究所独自の教員データベースを完成させた。

次回の参考にしていただくため、今回の外部評価の準備過程をまとめてみたい。まず、2006年7月に平成18年度第1回所内評価委員会を開催して、今回の外部評価(ORI External Review 2007)のあらましを決定した。その時に決めた事項は、外部評価委員会をまず発足させることである。外部評価委員は、分野のバランスをとるため6部門・3センターに国内外それぞれ1-2名の候補者を指名してもらうことになった。また、2007年秋に教員にデータを入力してもらい、最新のデータを電子媒体で外部評価委員に送ることを決めた。それを受けて、部門主任・センター長に外部評価委員候補者の推薦をお願いした。2007年1月に平成18年度第2回所内評価委員会を開催し、そこで推薦を受けた候補者から12名の国内委員と12名の国外委員を選び、2月にメールにて外部評価委員への就任を依頼した。うれしいことに全員から就任の内諾を得たため、寺崎所長から委嘱状を送っていただいた。委員長は、ハワイ大学のE.

Gordon Grau教授にお願いした。Grau教授はSea GrantのDirectorをされており、評価に関して豊富な知識と経験を持っておられた。一方、評価のための資料作成に関して、第2回所内評価委員会では教員の研究業績の必要部分を取り出してインターネットで外部評価委員が閲覧できるようにすることを決めた。その後、評価委員会は中期目標の達成度を評価するための現況調査表の作成に時間をとられたが、その1次案を提出し終えた10月に平成19年度第1回所内評価委員会を開催して、外部評価の今後の予定を話し合った。そこでは、教員データ集だけではなく、所全体の活動をまとめた資料集も作り、PDFファイルで外部評価委員に送付することを決定した。そこで、全教員に10月末までの最新データを教員データベースに入力することを依頼した。しかし、その後西田所長より今回も冊子体の外部評価資料を是非作ってほしいとの強い要請を受け、11月には全教員に資料集に記載する項目に関する個人データをまとめて提出することを依頼した。今回の外部評価に向けて整備をした教員データベースではあったが、データベースから必要事項を取り出し、外部評価委員に送付するためのPDFファイルを作るのは極めて大きな労力が必要であることがわかった。また、データベースへの入力を依頼しても、必ず1割以上の未入力があった。したがって、次回の外部評価においても、各教員に個人データの提出を直接依頼したほうが、完成度の高いデータ集を作成することができると思う。

いろいろ試行錯誤があったが、個人データを集めた'Individual Data of Faculty Members'を作成し、次に海洋研究所全体の活動に関する資料集'Summary of ORI Activities'を作ることになった。その作成と翌年3月に行う外部評価委員会の準備のため、外部評価準備ワー

キンググループ(以下準備WG)を11月に組織した。それからは、準備WGを中心として準備が急速に進められるようになった。第1回の会合で、資料集の各項目の担当者を決め、その項目に関する取りまとめを依頼した。今回は、きわめて短い期間に資料を作成しなければならなかったため、担当者、およびデータをまとめていただいた事務方にはかなり無理をお願いしたと思う。また、今回は国内評価委員の便宜を図るため英語と日本語双方の資料を作成したが、日本語は必要なかったと思われる。国内委員には日本語での報告書の作成もお願いしたため、日本語のみで書かれていた報告書がいくつかあり、担当する部門・センターに英訳をお願いするといった余分な手間がかかった。

準備WG委員と事務方の努力のおかげで、12月24日には'Individual Data of Faculty Members'、と'Summary of ORI Activities'、および2007年度海洋研究所年報・要覧を外部評価委員に送付することができた。その際、こちらで指定した所全体の活動に関する各項目、および担当する部門・センターの研究活動に関する評価を、2008年1月末までに所長あてに送付することを依頼した。3月の外部評価委員会前に評価報告を送ってもらったのは、それをもとに各部門・センターで対応について議論をしてもらい、3月に行われる委員会で外部評価委員と直接議論をってもらうことが重要であると考えたためである。議論をすることによって、我々が委員の意図を正しく理解するとともに、委員が冊子体の資料を読むだけでは汲み取りきれない海洋研究所や部門・センターの現状を正しく理解してもらう助けとなると考えた。しかし、実際に期限までに評価を送ってくれた外部評価委員は約半数に過ぎなかった。このように不十分な面もあったが、2月10日に各部門主任・



センター長にそれまでに送られてきた報告書をまとめて送付して、委員会当日の対応を依頼した。

外部評価委員会は、2008年3月5-7日に海洋研究所講堂を主会場にして開催された。詳しい日程については'Report of External Review'を参照していただきたい。うれしいことに、10名の国外委員と10名の国内委員が会議に参加され(図)、すべての国外委員と都外に住む国内委員に新宿ワシントンホテルに宿泊していただいた。5日の夕方には、ホテルに宿泊した評価委員と部門主任・センター長があらかじめ顔を合わせる場を設けた。この場で前もって評価報告書を送ってもらった理由を口頭でさらに詳しく説明した。6日の本会議では、まず所長が今回の外部評価の趣旨と海洋研究所の現状とそれを取り巻く環境を説明した。次に、各部門・センターの代表者が部門・センターの構成と所属分野を代表する研究トピックスなどを説明した後に、外部評価委員から頂いたコメントに対して回答することにより、部門・センターの研究内容やその現状をより深く、正しく理解していただいた。この本会議は、すべての教授会メンバーに公開の場とした。その後、会場を新宿ワシントンホテルに移し、多くの教授会メンバーに参加してもらい、今回の外部評価における評価委員の労をねぎらった。最終日には、外部評価委員に所内の施設や設備を案内する海洋研究所ツアーを行い、その後外部評価委員のみによる非公開の総括会議が行われた。その会議において、各外部評価委員は担当部門・センター毎に分かれてグループを作り、本会議などの議論により得たより詳しい情報をもとに各部門・センターに関する最終報告書を作り、その場でGrau委員長に提出した。委員長は、その報告書を読んでその内容について各グループにさらに質問をして、深い議論を繰り返していた。

Grau委員長は、会議後に5日間海洋研究所に残り、委員から提出された最終報告をもとに今回の外部評価の最終報告書の執筆を行った。さらに、最終報告書の内容に関して補佐会メンバーと話し合う機会を作っていた。最終報告書(Report of External Review)は、Grau委員長による最終報告を中心として、これまでの外部評価の歴史と今回の外部評価の概要をまとめたもの(文責竹井)、および補遺として各外部評価委員から提出された報告書を綴じたものと共に、4月末日に冊子体として上梓した。

最後に、今回の外部評価を担当して感じたことを書いておきたい。第1の点は、外部評価は極めて重要であるが、その準備などを教員のみで行うのではなく、大学として外部評価の専門家を養成してもらえないだ

ろうかという思いである。外部評価には知識や経験が極めて重要で、やり方によってその内容と得られる成果が大きく変わってくる。教員が研究に費やす時間を守るためにも、将来は大学本部から各部局に専門家を派遣して、全体の取りまとめをしていただけるとありがたい。第2の点は、海洋研究所のように学際的な研究所において、バランスのとれた評価をすることの難しさである。外部評価のやり方として、仲間内から評価委員を選んで形式的な評価をする方法があるだろうが、あまり意味のないことに時間をとられるという虚しさがどうしても残る。そこで今回は、外部の人たちが海洋研究所に何を期待しているのかを知り、海洋研究所の将来の向上に資するものにしようと考えた。しかし、異なる研究分野では考え方に大きな違いがあり、今回の外部評価においても全てを満足させることがきわめて難しかった。例えば、すべての分野の研究内容を理解することができる委員長を選ぶことはほぼ不可能である。分野間のバランスをとるため、各部門・センターで均等に国内・国外の外部評価委員を選んでもらったが、外部評価の経験や評価に費やす時間が委員により大きく異なり、送られてきた評価報告書の質や量に大きな差があった。委員長は最終報告書をまとめるための総括会議で、各部門・センターを担当する評価委員にいろいろ質問をして、分野間のバランスをとる努力をしていたが、委員長が書く最終報告書ではどうしても委員長の専門分野での記載量が増えてしまう。この点に関して次回の外部評価でよく話し合っしてほしい。外部評価は、海洋研究所の分野間の評価の違いを比較するためのものではなく、国内や国外の同様の研究施設と比較することにより、優れている点や劣っている点をあぶりだし、将来どのような方向に進むべきかを知るためのものである。今回の外部評価をそのためのよい機会であると捉えて、守りではなく攻め(改革)への姿勢をとってほしいと願っている。

今回の外部評価は国立大学の独立法人化に伴う中間評価と重なったため、評価委員会として外部評価だけに集中できない環境にあった。しかし、準備WG委員の皆さんや事務方の強いご支援、及び教員の皆様の資料作成におけるご協力のおかげで恙なく終えることができた。心からお礼を申し上げる。ここでは各準備段階で活躍してくれたWG委員の名前を挙げなかったが、委員名簿は'Report of External Review'に記した。初めに予定していたよりもかなり長文になってしまったが、この拙文が次回の外部評価に役立ってくれることを期待して筆を置く。

●平成19年度女子中高生理系の進路選択支援事業

「海が好き、そして輝け未来！ オーシャンサイエンスで活躍する女性研究者たち」 女子中高生に海洋研究の魅力を伝える活動 ～東京大学海洋研究所の試み～

先端海洋システム研究センター 海洋システム解析分野 教授 窪川 かおる

海洋科学を看板とする海洋研究所は理系の研究所の一つです。海洋研究所の女性研究者を中心として、女子大学院生やポスドクが協力し、文部科学省の理系選択支援の競争的資金を得て、高校へ出張授業と白鳳丸見学会を実施しました。貴重な体験となった2年間の実施概要とその結果分析をご紹介します。

平成18年度に文部科学省は、「女子中高生理系進路選択支援事業」を開始しました。その名の通りの事業ですが、漢字の連続は読みにくく、翌年は、「女子中高生の」と変更されました。このタイトルだけで、女子中高生と理系の女性研究者は少数なので理系の女性を増す試みであることが容易にわかります。正確を記すために文部科学省のHPによれば、その目的は「女子中高生の科学技術分野に対する興味・関心を喚起し、

理系への進路選択を支援する」ことです。またその背景は、再びHPによれば、「現状では、我が国は女性研究者の比率が欧米諸国に比べ著しく低く、また、特に理工系の学部・大学院において女性の割合が低い状況にある。さらに、科学技術分野の職業に関する情報提供が十分ではなく、特に女性の場合、家庭生活との両立への不安などとあいまって、女子中高生が自らの進路を考える上で、大学卒業後(あるいは大学院修了後や専門学校卒業後)の進路を想起しにくく、理系への進学を躊躇しがちな傾向が見受けられる。」ということです。つまり、理系に限るけれども勉強や職業の選択肢を広げてあげよう、ということでも親切な事業です。しかし、現代はインターネット、テレビ、その他の多数の情報源から日常的に溢れるほどの情報を子供たち

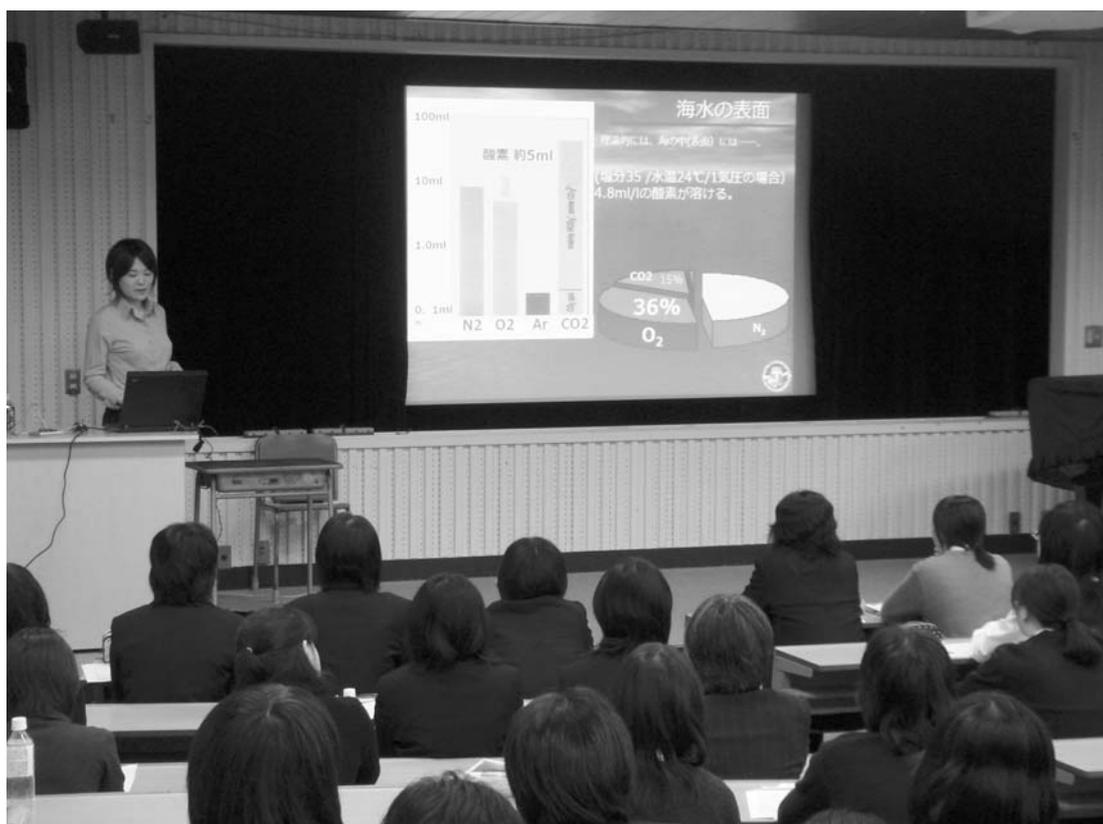


写真1：出張授業

は得ることができる時代です。平成18年6月にこの事業の公募の知らせが海洋研究所のメーリングリストを通じて配信されたとき、今更なぜ進路選択の支援が必要なのだろうか、と思いました。なぜを検証すべく、平成18年度は「海が好き！ オーシャンサイエンスで活躍する女性研究者たち」を、平成19年度は「輝け未来！ オーシャンサイエンスで活躍する女性研究者たち」を実施することになりました。その結果わかったことは、情報に溢れていると思っていた女子高校生は、「海洋科学」、「海の学問」という分野をあまり知らない、という現実でした。

実施内容は、高校に教員と大学院生が出向いて授業をする出張授業と、白鳳丸見学会の2本立てが特徴です。事業の運営には、女性教職員6名(窪川かおる、沖野郷子、塚本久美子、大村亜希子、中山典子、井上麻夕理)が全般を通して実施の責任者となり、出張授業には、ポスドク、女子大学院生のべ28名が同行し、白鳳丸見学会では、女性と限らず、海洋研究所に広く協力を得て、教職員、ポスドク、大学院生、白鳳丸乗組員の総勢128名のご協力をいただきました。海洋研究開発機構には白鳳丸の利用を快くご了承いただき、ご協力をいただきました。1年目は白鳳丸見学会と同日程で「しんかい6500」の1000回潜航記念と「よこすか」一般公開を晴海ふ頭で行なうことになり、また文部科学省副大臣が突然白鳳丸を訪問する予定となり、それらの事前準備でこちらも大変な仕事となりました。こういう時にはJAMSTECの事務組織の大きさをつくづく実感します。結局、直前に副大臣訪問は取り止めになり、大騒ぎは終結しました。

出張授業は、出向いた高校の地元の大学の教員にお世話をいただき、さらにその大学の学部・大学院生数名に出張授業に同行してお手伝いをしていただきました。1年目は、東京大学教育学部附属中等教育学校、諏訪清陵高等学校、掛川高等学校、宇都宮女子高等学校、慶応義塾女子高等学校、2年目は、宇都宮女子高等学校、浦和第一女子高等学校、川越女子高等学校に出向きました。7つの高校で約600名の女子高校生が受講したことになります。

出張先あるいはその準備段階で、女性教職員と女子大学院生との交流ができたことはよい機会になりました。海洋研での交流の機会は多くの場合シンポジウムや親睦会であったり、共同研究だったりしますが、このような大学院生を含めた分野横断的な交流が、しかも共同作業の機会として今後も増えていくとよいと思います。今回は、企画、白鳳丸見学会、テキスト作成など、多くの場面で交流が実現しました。

出張授業では、全員がエピソード豊富に履歴を交えた話をし、教職員が専門の授業を、大学院生が自身の研究内容、船を使った研究と船内生活、大学院生の一日、などの講演をしました。特に大学院生による自分自身の研究と進路選択の話は好評でした。多様な経歴の女性がいることは、高校生の進路選択の参考になったのではないのでしょうか。一方、授業を行った私たちも貴重な体験ができ、高校生に理解できるプレゼンテーション法について考える機会となりました。同行した大学院生も、一般の人々に自分の研究内容を話す難しさを経験し、同時に真剣に聞いてくれるという経験もし、よい機会だったと思います。男女共同参画では、男女の差を少なくすることと同時に、女性としてのロールモデルを示すことも求められています。海洋研の若手女性研究者たちと女子大学院生たちの極めて高い能力を、研究活動と大学運営に大いに生かし、さらなる発展をしていただきたいと心から願っています。

授業は2時間程度の中にギュウギュウに詰め込んだので、その後の勉強用に使えるテキストを作成しました。事務補佐員だった前田るりさんと大学院生だった内田奈美さんがデザインし、教科書サイズで左ページには文字を、右ページには図・写真を、と読んでも見ても楽しいテキストになりました。指導要領や受験とは関係ない副読本ですが、高校の先生、出版関係者などから、今までに無い海に関するテキストでよく出来



写真2：白鳳丸見学会。プランクトン採集

ている、とお褒めいただきました。現在出版企画が進行中です。

白鳳丸見学会は、平成19年3月27、28日、および平成19年11月24、25日に、晴海ふ頭停泊中の白鳳丸で実施しました。参加者は合計で、女子中高生60名、教諭15名、保護者23名、その他4名でした。当初は100名参加などと考えていたのですが、これは無謀な計画であり、現実的には1日に50名の受け入れでも精一杯でした。見学会は、講演、見学、実習の3本からなり、10時から15時と盛りだくさんの内容を経験してもらいました。沖野さんが1年目の責任者として完璧な見学会実施要領を作成し、2年目は大村さんが引き続き立派に責任者を務めました。

白鳳丸見学会では、参加者は、まず旅客ターミナルに集合し、海洋科学の研究成果の講演2、3題と、船を使った観測の説明、船内の説明、見学の際の注意点と救命胴衣の着け方の説明を受け、見学のイメージを持って白鳳丸に乗船しました。2～3班に分かれて船の研究室や居住区の説明を聞きながら見学し、甲板では大型プランクトンネット、採水、岩石ドレッジ、ピストンコアラーなどの観測機器を見学しました。実際にプランクトンを手曳きネットで採集して顕微鏡観察したり、採水した東京湾の水の溶存酸素濃度を測定したり、

コアサンプルの見方を習ったり、実習も体験してもらいました。昼食時には食堂でお弁当を食べながらスタッフとの歓談をしましたが、私たちの日頃の早食いのせいか、短時間過ぎたようです。それでも、楽しい一時でした。

出張授業と白鳳丸見学会で、アンケートをお願いしたところ、平成18年度はおよそ80%が、平成19年度においては90%の参加者が海洋科学のイメージが変わったと答えていました。フィールドでの現場仕事を伴う理系分野にも女性が進出し、男女の隔てなく活動できることを知ってもらえたことは有意義でした。実際に接して海洋科学を身近に感じた、海洋科学に興味を持った、授業や見学会にまた出たいなど、海洋科学の理解が進み、理系選択への支援になったことがうかがえる結果となりました。

事業のホームページを作成しています。簡単なものですが、是非ご覧ください。(http://www.ori.u-tokyo.ac.jp/project/shingaku/index.html)事業の様子は、東京大学学内広報、読売新聞(教育面、全国版)に「海の科学者」女子生徒にPR、として掲載され、東京大学内でも広報されました。沖野さんと大村さんは2007年の日本地球惑星科学連合大会で本事業をポスター発表しました。

資金を得て行ってきた事業ですので、今後の継続



写真3：白鳳丸見学会。採水器の横でバンドンの採水実習

が問題になりますが、取組みの必要性を強く感じます。今後、出張授業の要請があれば対応していきたいと思いますが、白鳳丸見学会は、海洋研究所が男女に関わらず、海洋科学の次世代を育てるために是非継続して欲しい企画です。動いている船で実施しないのか、と必ず聞かれますが、船で研究に従事している研究者や船員が、丁寧に説明をし、参加者に船の研究を理解してもらうことが重要だと考えています。東京湾でレインボーブリッジの下をくぐれば生徒は大歓声を発すると思いますが、参加者の安全、説明や実習への集中を考えると、今の停泊中のスタイルは悪くありません。いずれにしても海洋科学に船が不可欠であることは伝える必要があると考えています。

事業の内容は、報告書に詳しく記載し、白鳳丸見学会の様子はDVDにしましたので、ご希望の方はご連絡ください。出張授業と研究船の見学会を通して、「オーシャンサイエンスはどのような学問か」「女性研究者も女子大学院生も元気に楽しく研究・勉学に勤しんでいること」を伝え、理系の進学進路を示すことが少しはできたのではないのでしょうか。最初の一歩ではありますが、男女ともに海洋科学を志す若い後継者育成に力を注いでいく一助になることを願っています。

最後に、本事業の実施には、白鳳丸鈴木船長と藤田

船長、白鳳丸船員の皆様、JAMSTEC運航部のご協力をいただきました。また、海洋研究所の教員、職員、ポスドク、大学院生に大きな声援をいただきました。皆様に深く感謝申し上げます。

本事業は、平成18年度、平成19年度の文部科学省科学技術人材養成等委託費による「女子中高生の理系進路選択支援事業」で実施されました。



写真4：白鳳丸見学会。コアの解説

ハワイ大学との海洋科学合同シンポジウム開催報告

海洋生命科学部門 生理学分野 准教授 兵 藤 晋
海洋科学国際共同研究センター 企画情報分野 准教授 井 上 広 滋

2008年3月13日から15日にわたって、東京大学とハワイ大学のジョイントシンポジウムを開催いたしました。海洋研究所とハワイ大学海洋・地球理工学部は、1991年より部局間学術交流協定を締結し、2004年からは東京大学とハワイ大学との間の大学間交流協定へと発展してきました。これまでは、研究者あるいは研究室単位での研究交流が行われてきたものの、交流協定を活かした具体的な交流はありませんでした。昨年度、兵藤がシュモクザメの調査研究のためにハワイ大学海洋生物学研究所に短期滞在中、共同研究先のGordon Grau教授からジョイントシンポジウムの提案がありました。Grau教授はHawaii Sea Grantのディレクターでもあり、Sea Grantの予算で海洋生物学に従事する若手スタッフを派遣できるとのことでした。すぐにハワイから西田睦所長ならびに補佐会の先生方に打診したところ、ぜひ進めましょうとご快諾いただきました。東京大学としても、単に交流協定を結ぶだけでなく、具体的な研究・人的交流を推進しようという方針があり、本シンポジウムはそのための良いきっかけとなるだろうと考えられました。

ハワイ大学側の来日研究者との関係もあって今回は

沿岸海洋生物学にテーマをしぼり、研究の現場で活躍中の若手・中堅研究者が中心となって進めることで、将来の共同研究の企画提案を視野に入れたシンポジウムとしました。実際の運営に関しては、実行委員会を組織し、海洋科学国際共同研究センター主催シンポジウムとして行いました。

初日(13日)の午前中には、西田所長、木暮一啓副所長、Grau教授らによるビジネスミーティング、引き続き講演者と実行委員を含めた全体ミーティングを行い、両研究機関の紹介ならびに本シンポジウムの目的や今後の展望について話し合いました。13日の午後から始まったシンポジウムは三部構成で、海洋生物の多様性・生理学・生態学、サンゴ礁の生物学、海洋構造と生物地球化学、をテーマとして行いました。日本側は海洋研究所の若手・中堅スタッフ・大学院生が10件の研究発表を行いました。京都大学の笠井亮秀博士、産業技術総合研究所の鈴木淳博士にはご多忙のところわざわざお越しいただき、最新の研究成果をご紹介いただきました。ハワイ側も大学院生2名を含む10名の発表があり、活発な意見交換が行われました。シンポジウムだけでなく、前日の夜には顔合せ親交会、14日

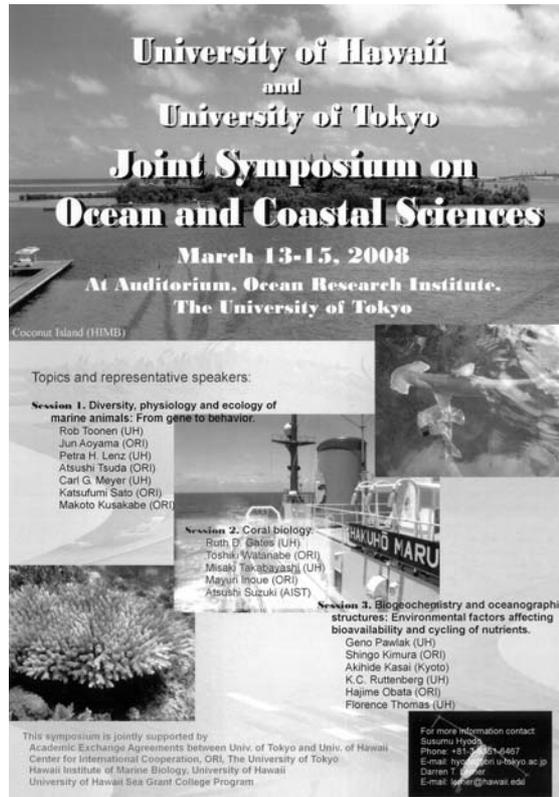


の夜に懇親会、15日には関連する研究者・研究グループ単位でグループディスカッションを行い、交流を深めると同時に、将来の共同研究についても具体的な打合せを行うことができました。

ビジネスミーティングにおいては、本シンポジウムを約3年ごとに継続して行うことと、次回はハワイにて開催することが確認されました。本シンポジウムをきっかけとして、多くの共同研究が生まれ、これまで以上に活発な交流が推進されることを願っています。

最後になりましたが、本シンポジウムを開催するにあたっては、事務部・研究部の多くの方々にご支援をいただきました。深く感謝の意を表します。

組織委員会ならびに実行委員会(敬称略)
西田陸、木暮一啓、植松光夫、大竹二雄
青山潤、井上広滋、小畑元、佐藤克文、近泰子、濱崎恒二、兵藤晋、馬淵浩司、渡邊俊樹(50音順)



●業務改善 「総長賞」受賞

2007年度業務改善「総長賞」表彰式にて ～500人が見つめる中、安田講堂の壇上で～

海洋研事務部の会代表 近 泰 子

内定の吉報が舞い込んだのは、11月も終わりのことでした。

「おめでとうございます。このたび多数の応募があった中、厳正なる審査を行い、海洋研さんの取り組みが、『業務改善プロジェクト推進本部長賞』に決まりました。」と。

3年前海洋研に初めて着任したとき、勝手のわからないことばかりで日々ストレスを感じていました。何をすればよいのか？誰に聞けばよいのか？さまざまな書式は一体どこにあるのか？疑問だらけの毎日でした。

仕事の要領を得た後も、新しく来た方々からは、以前のわたし同様に、書式がわからないというリクエストをいただき、その都度メールでお送りするということが繰り返されていました。

この誰にとっても煩わしい状況をどげんかせんといかん！と、いろいろ模索していたときに見つけたのが、新しく海洋研究所にいらしたみなさまへ—海洋研での「どうしたらいいの？」をご案内します—でした。

これは2,3年前に1度だけ、新しく海洋研にきた教職員・学生向けに、紙で配られた幻の一品です。ここには、新しく来た人が、"これさえ押さえておけばとりあえずは大丈夫!"と、いう最低限の情報が網羅されています。これを再度見直して、海洋研のホームページに載せ、さらに、各種様式をWEB上から直接ダウンロードできるようにしました。

参考

(<http://www.ori.u-tokyo.ac.jp/internal/j/newcomer-staff.html>)

平成19年12月21日(金)正午。普段よりドレスアップした7人(片桐、住谷、平松、濱田、酒井、市川、近)は、2007年度業務改善「総長賞」表彰式のため、緊張の面持ちで安田講堂に向かいました。

午後2時。審査の経緯の後、表彰状と副賞を無事いただきました。(実は、直前に告げられた非常に細かい段取りを暗記するのに精一杯で、プレゼンよりも緊張していたのです。)

小宮山総長の講和があり、さあいよいよ入賞課題の発表が「総長賞」の組から始まりました。推進本部長賞のわれわれ海洋研は、4番目です。わたしは最前列のど真ん中の席でそれらに耳を傾けてはいたものの、内心は1組また1組と終わるごとに、頭の中では映画『ジョーズ』の効果音が流れていました。

海洋研事務部の会の名がコールされると、わたしたちは安田講堂の壇上に上がりました。500人の注目を一身に集めます。いつも下からしか見上げたことのない壇上に、今はわたしたちが立っています。正味たった5分のプレゼンテーションで、取り組み前の状況や問題点、取り組んだ内容とその成果を述べます。パワーポイントを作ったのもこれが初めてであれば、人前で己の取り組みを披露するのももちろんこれが初めて。しかし、緊張と高揚、そしてその後で得られた達成感は、一生忘れられません。みんなにやさしい辞書のような拠り所をHP上に置くことで、仕事上のストレスや不安が少しでも軽減されればと願った小さな思いは、図らずも飛んだご褒美を頂戴いたしました。





写真1：新宿副都心のビル群を背に喜びを表現する海洋研事務部の会・7人の侍たち
(前列左から 住谷、片桐、近、濱田
後列右から 平松、市川、酒井)



写真2：辰野理事より表彰状授与
(「総長賞」の賞状に比べて
こちらはかなり小振り)



写真3：場内満員御礼
(500人を超える聴衆に見つめられながらの
緊張のプレゼン)



写真4：安田講堂壇上にて整列
(冒頭のメンバー紹介時)



写真5：表彰式の後、総長とちゃっかり
(受賞者全員で記念撮影)

海洋研究所防災訓練を実施

事務部経理課 専門職員(安全衛生管理担当) 高野 哲 郎

11月29日(木)13時20分から平成19年度海洋研究所防災訓練が海洋研究所中野キャンパスにおいて、気温11度、肌寒い北東の風の中、教職員、院生等約190名が参加し実施された。

当日は地震によりB棟1階(講堂準備室)での出火を想定し、同階の第一発見者の「火事だー」と大声で周囲に知らせることから始まり、初期消火、避難訓練を行った。

同時に垂直式救助袋によりA棟3階の教職員が同時に避難を行い避難器具取扱いの取得及び体験を行った。

その後、中野消防署の指導のもとに海洋研究所自衛

消防隊・消火班により屋内消火栓による放水訓練を行った。引続き訓練の場所をB棟の講堂及びその周辺に移し、消火器を使用した消火訓練、包帯法及びAED(自動体外式除細動器)を使用した応急救護訓が実施された。

本所では11月初旬にAED(自動体外式除細動器)がA棟玄関脇に配置されたばかりで、今回の訓練では使い方を知らない参加者が殆どであったので、初めてその使い方を知るうえで、有意義な訓練となった。

参加者は真剣に訓練に取り組み、避難者の確認等、訓練の重要性を再確認した。



●所内行事

クラシックの夕べ in ORI

海洋生命科学部門 分子海洋科学分野 川原 玲 香

海洋研究所では、厚生委員会活動の一環として2月21日(木)夜、国内外で幅広く活躍されている橋本洋さん(ヴァイオリン)と木暮淳子さん(ピアノ)、中村翔太郎さん(ヴィオラ)をお招きし、所内講堂にて「クラシックの夕べ in ORI~橋本洋ヴァイオリンリサイタル~」を開催しました。今回の催しは所内教員に縁のあるピアニストの木暮淳子さんのご厚意により実現したものです。

プログラムはプロコフィエフの「ヴァイオリンとピアノの為のソナタ第2番作品94」、バッハの「無伴奏ヴァイオリンの為のパーティータ第2番よりアルマンド、シャコンヌ」、ハルヴェルセンの「ヘンデルの主題によるヴァイオリンとヴィオラの為のパスサリア」、ラヴェルの「ツィガヌ」等で、誰もがよく知っているクライスラーの小品も演奏されました。

昨年の「JAZZ in ORI」では独創的なステージの飾り付けが評判でしたが、今年も実行委員がアイデアを

出し合い、素晴らしい演奏会場がづくりあげられました。ステージは講堂の中央に配置され、その上部には花を生けた大小様々なガラス花器が照明に照らされてキラキラと輝き、幻想的な雰囲気を醸し出しました。

コンサートでは、初めに厚生委員長でもある西田所長のあいさつの後、大気力学分野の新野先生から、このメンバーの出会いについてのいきさつなどの紹介がありました。3人の演奏者が奏でる繊細かつ情熱的な演奏に聴衆は最初から最後まで圧倒され、至福のひとときを過ごしました。アンコールではサラサーテの「ツイゴイネルワイゼン」が演奏され、全員を感動の渦に巻き込みました。

最後になりましたが、このコンサートを無事成功させることができたのは、実行委員会の皆様、また西田先生をはじめとする厚生委員会の皆様、さらにはコンサートをききに来てくださった皆様方のおかげです。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2月21日(木)
17時30分開始 18時開演

クラシックの夕べ in ORI Hiroshi Hashimoto
橋本 洋 ヴァイオリン・リサイタル

プロコフィエフ：ヴァイオリンとピアノの
為のソナタ第2番 作品94
バッハ：無伴奏ヴァイオリンの為のパーティ
ータ第2番より
ヘンデル：ハルヴェルセン：ヴァイオリン
とヴィオラの為のパスサリア
クライスラー：コレトリの主題による演奏
曲、愛の恋しみ、愛の喜び
ラヴェル：ツィガヌ

東京大学海洋研究所講堂
主催 厚生委員会 (入場無料)
問い合わせ (総務課) Tel 03-5351-6346



●新スタッフ紹介

池田 貞雄 (事務部長)

出身は茨城県神栖市。現在は同じ茨城県の守谷市から通勤しています。

趣味は「東京」の街歩き。その中で「江戸」を感じることができればと思っています。

将来への抱負あるいは海洋研への期待

東大に何十年と在職している割には、海洋研の研究活動について全くと言っていいほど知りませんでした。着任してみて、社会的にも注目される研究教育が幅広く展開されていることを知りました。最近“可視化”という言葉をししばしば見聞きます。本研究所の研究教育も所外社会から、もっと可視化できるようにする必要がありますと思っています。事務部門としても研究教育支援体制の充実に努めてまいりたいと考えておりますので、ご指導・ご協力方よろしくお願いたします。

大森 弘光

(国際沿岸海洋研究センター・事務室係長)

出身は岩手県大船渡市

趣味はバドミントン、スポーツ観戦

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待

久々に沿岸地方に戻り、潮の香りを懐かしく感じながら過ごしています。海洋研究センターでは、右も左も分からずにご迷惑をおかけしておりますが、少しでも研究等のお役に立てるよう頑張ります。

菊地 みつ子 (総務課・専門員)

出身は宮城県栗原市

趣味はスポーツ全般、登山等

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待

最近、海釣りの機会があり、山育ちの自分には珍しく海に興味を持った矢先の異動で驚いています。三陸では、豊かな資源を守るため、ボランティア活動として、山の整備を行っている若者達があります。様々な形で活躍している教員と、ここで学ぶ学生達の研究・教育支援の架け橋になると共に、安心できる環境を取り戻し、次世代に引き継ぎたいと思っていますので、よろしくお願いたします。

小松 幸生

(海洋生物資源部門・環境動態分野・兼務准教授)

出身は広島県呉市で、自宅は神奈川県逗子市です。

趣味は読書で、学生時代は活字中毒に罹っていましたが、さすがに就職後は読書量が激減して健康になりましたが、4月から片道2時間弱かけて通勤するようになり、読書の機会が増えたので病気の再発を恐れています。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待

海洋研は今いろんな意味で大きな転換期にあります。海洋研は、海洋を対象とした新しい学問領域の創出と既存の学問領域の深化の両面で大きな役割を担っていますが、この転換期にうまく進化を遂げるには、海洋研の最大の特徴でもある多岐にわたった分野において、分野間の相互作用を一層促進する必要があります。新人が期待されている役割はその触媒になることと考えますが、院生の皆さんと悪戦苦闘しながら海洋研とともに自分も進化することができればと思います。

永田 俊

(海洋化学部門・生元素動態分野・教授)

出身は長野県中野市です(オリンピックを開催した志賀高原のふもとです)

趣味は、若い頃は山登りとかスキーとかしてそれなりにスポーツマンでした(過去形)。いまは、おいしい食べ物とお酒を楽しむのが趣味(メタボが心配)。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待

これまで関西(京都・滋賀)にも関東(東京)にもそれぞれ10年以上暮らしましたが、お料理の素材や味付けが、やっぱりちがいますね。京都には京都の、東京には東京のいいところがあると思います。地方を旅して珍しい食べ物に出会うのも楽しい。このような多様性というのは、おそらく科学の世界でも大事なかなと思います。A棟地下の突き当りの部屋におりますので、お気軽にお立ち寄りください。

山岸 公明 (経理課長)

出身は、富山県(立山連峰、蜷気楼、ホタルイカなど)

趣味は野球観戦(特に、高校野球の観戦では毎年感動しております。)

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待

柏キャンパスへの移転等に向けまして、微力ではございますが、皆様方と一緒に取り組んでまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

東京大学海洋研究所

〒164-8639 東京都中野区南台1-15-1

Tel : 03-5351-6342

Fax : 03-3575-6716

ホームページ : <http://www.ori.u-tokyo.ac.jp/>